第 1 部

解説：小宮正安

第 1 部の幕開けは、**「シューベルトのワルツ・カプリスによる《ウィーンの夜会》」**これは、フランツ・シューベルト（1797-1828）が生涯残した幾つものダンス音楽を基に、1852 年、フランツ・リスト（1811-86）がいわば二次創作を加えた曲だ。ワルツ黎明期の朴訥な響きが、ワルツが広く認知された時代の華麗な響きをまとって蘇る。合計 9 曲からなる作品集だが、本日は第 7 番が演奏される。

黎明期のワルツを、一大ジャンルへ引き上げた 1 人が、「ワルツの父」で知られるヨハン・シュトラウス 1 世（1804-49）。売れっ子の彼は、自前のオーケストラを率いて 1 年以上に及ぶ演奏旅行までおこなったが、病気にかかり、ウィーンへ戻った。そんな彼が回復を遂げ、1839 年に開催された舞踏会で披露したのが、**ワルツ《喜びの挨拶》**である。

このシュトラウス 1 世の息子こそ、今年生誕 200 周年を迎える「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス 2 世（1825-99）である。しかも父親の猛反対にもかかわらず、ダンス音楽家として 1844 年にデビューを果たした際に披露した作品の1つこそ、**《デビューのカドリーユ》**だ。そんな、シュトラウス 2 世のデビュー前夜、彼が作曲の基礎を学んだ人物が、ヨーゼフ・ドレクスラー（1782-1852）である。オルガニスト、指揮者、作曲家、教育者として活躍した彼は様々なジャンルの曲を書いており、**「弦楽四重奏曲 第 1 番」**もその1つだ。

19 世紀前半のウィーンは、フランス革命の体現者を自認するナポレオン・ボナパルト（1769-1821）の失脚後、ヨーロッパ中に確立された保守反動体制の牙城と化す。だが言論の自由を求める声が徐々に高まった末、1848 年になると革命が勃発した。そんな革命にシュトラウス 2 世も熱狂。反動体制の象徴と見なされていた修道会の聖職者を揶揄した、冗談要素満載の**ポルカ《リゴーリ坊主のため息》**を作った。

いっぽうシュトラウス 1 世も、当初は革命に共感していたものの、革命が過激化の一途をたどるにつれて距離を置くようになる。結果、同時期にオーストリア支配下のイタリアで起きた革命の鎮圧に向かった軍人ヨーゼフ・ラデツキー（1766-1858）を讃える**《ラデツキー行進曲》**を書くまでになった。しかも当時は彼以外の作曲家も、ラデツキーはもとより、ハンガリーでの革命を鎮圧した軍人ヨシップ・イェラチッチ（1801-59）を讃美する曲を発表してゆく。天才少女音楽家として有名だったコンスタンツェ・ガイガー（1835-90）が書いた**《ラデツキー行進曲》**、**《イェラチッチ行進曲》**も、その証である。

さて件のウィーンの革命自体だが、革命を起こした側の内部分裂もあり、最終的には鎮圧された。シュトラウス 2 世も、革命に最後まで加担したかどで一時期干されるものの、それでもシュトラウス 1 世の急死を受け、徐々に復帰を図ってゆく。しかも、リストをはじめ音楽界の最先端をゆく作曲家の実験的な技法を採り入れ、ワルツの刷新も着々とおこなった。1854 年に作られた妖しげな魅力満載の**ワルツ《蛾》**も、その一例である。

革命を機に、わずか 18 歳の若さで皇帝となった時の為政者フランツ・ヨーゼフ（1830-1916）も、そうした時代の変化を的確に見抜いていた。革命後の混乱が落ち着き始めたころ合いを見て取った彼は、勃興しつつあった市民階級の力を活用すべく、帝都ウィーンを近代都市へと大改造する。そんな最中の 1862 年、中世以来の古い市壁が壊されてゆく様を踏まえてシュトラウスが発表したのが、**《取り壊しポルカ》**に他ならない。

第 2 部

解説：小宮正安

昨年、生誕 200 周年を迎えたアントン・ブルックナー（1824-96）。シュトラウス 2 世とは 1 歳違い、しかもその朴訥なイメージとは裏腹に、近代都市へと変貌を遂げつつあったウィーンに移住し、「シティ・ガイ」として過ごした彼の生活ぶりが近年では明らかにされつつある。そんなブルックナーが 1873 年に初稿を完成したものの、初演の機会に恵まれず、1877 年に改訂稿を完成させてようやく初演にこぎつけたのが、**「交響曲第 3 番」**である。本日はその中から、ワルツ同様に3拍子を基本としたスケルツォの第 3 楽章を取り上げる。

都市改造が進むウィーンで変貌を遂げたのは、街並みだけではない。帝政が存続してはいたものの、旧来の特権階級だった貴族にかわり、政治、経済、文化等様々な分野において市民が力を持つようになった。そうした中で特に成長著しかったのが、新聞や雑誌をはじめとするジャーナリズムである。実際この頃になると、ジャーナリストたちの協会による大規模な舞踏会も催されるようになり、シュトラウス 2 世にもしばしば依頼がなされた。1868 年に書かれた**ワルツ《ジャーナリスト》**も、そうした経緯から生まれた作品である。

多忙をきわめたシュトラウス 2 世をサポートすべく、エンジニアになる夢をあきらめ、ダンス音楽の世界で働くようになったのが、弟のヨーゼフ・シュトラウス（1827-70）である。シュトラウス 2 世に勝るとも劣らぬ才能の持ち主だった彼もまた、時代状況を色濃く映し出した曲を幾つも作った。耐火金庫の発明と販売で成功した商会が催す舞踏会にあたり、1869 年に作られた**《鍛冶屋のポルカ》**もその 1 つ。このヨーゼフよりさらに年下の弟だったエドゥアルト・シュトラウス（1835-1916）も、シュトラウス 2 世のサポート役として、ダンス音楽家の道を歩んだ。本日は彼の作品の中から、1871 年に作曲されたポルカ**「セレナーデ」**（オリジナルの形は合唱付きポルカだった）を取り上げる。

このようにして都市改造を通じ、帝都ウィーンは近代都市としての輝きを放ついっぽう、この街を帝都とする名門貴族ハプスブルク帝国の巨大領土、いわゆるハプスブルク帝国は、内憂外患の危機に晒されていた。その典型が、1866 年にドイツ統一の主導権をめぐって宿敵プロイセンと戦い、敗北を喫した出来事である。勝利を収めたプロイセンの側では、それを記念して幾つもの曲が作られた。戦争の勝敗を決めた合戦の地名を冠して書かれた、ヨハン・ゴットフリート・ピーフケ（1815-84）による**《ケーニヒグレッツ行進曲》**もその1つである。

他方敗戦を通じ、ウィーンでは大きなショックが広がっていた。そうした中で、意気消沈するウィーン子を鼓舞すべく、シュトラウス 2 世が 1867 年に作ったのが、男声合唱のためのワルツ**《美しく青きドナウ》**（歌詞はヨーゼフ・ヴァイル〈1821-95〉）である。なおこの題名だが、元はと言えば、カール・イシドール・ベック（1817-79）という詩人が書いた詩の一節から採られたもの。ウィーンを中心に活躍した教師であり合唱指揮者のエルンスト・シュミット（1835-1901）も、この詩に基づいて、男声合唱とテノール独唱のための作品を手掛けている。

このように様々な影に見舞われる中で、だからこそマイナスをプラスに転換しようという動きも大きかったのだろう。恐ろしい自然現象を陽気な調べに乗せて描いた、シュトラウス 2 世による 1868 年の作品、ポルカ**《雷鳴と電光》**もその典型である。

第 3 部

解説：小宮正安

シュトラウス 2 世と親しく交流し、音楽的な刺激を互いに与え続けた音楽家の 1 人が、ヨハネス・ブラームス（1833-97）だ。彼は幾つものワルツやダンス音楽を書いているが、その影響は、1883 年に作曲された**「交響曲第 3 番」**の第 3 楽章にも現れている。

第 2 部の解説でも述べたように、当時のハプスブルク帝国は様々な内憂外患に見舞われた。ハプスブルク家の支配下にあったイタリアが、1861 年に独立したのもその表れ。ただしそうであるからこそ、帝都ウィーンを中心に、太陽の輝く地へ寄せる憧れはいっそう強まってゆく。シュトラウス 2 世も 1874 年、イタリアへ演奏旅行をおこない、新作ワルツ《美しきイタリア》を披露した後、これを**《レモンの花咲くところ》**と改名した。なお本日上演されるバージョンは、同年アン・デア・ウィーン劇場で催された特別公演にあたり、同劇場の看板ソプラノ歌手マリー・ガイスティンガー（1833-1903）のために編曲されたもので、歌詞は同劇場の楽長兼台本作家だったリヒャルト・ジュネー（1823-95）の手になる。

アン・デア・ウィーン劇場は、40 歳代以降オペレッタの作曲に乗り出したシュトラウス 2 世の作品が数多く初演された場所である。特に、台本の一部をジュネーが書き、ガイスティンガーがヒロインを歌って 1874 年に初演された**喜歌劇《こうもり》**は、大成功を博した。そんな《こうもり》ブームの証として、ブラームスとも近しい間柄にあったロベルト・フックス（1847-1927）が 1894 年に作曲し、シュトラウス 2 世に献呈した**「セレナーデ第 5 番」**の第 4 楽章、および初演時にはガイスティンガーが歌った**「チャールダーシュ」**を取り上げる。

当時のウィーンのダンス音楽世界で人気を博したのは、シュトラウス・ファミリーだけではない。フィリップ・ファールバッハ 1 世（1815-85）をはじめとするファールバッハ・ファミリーもその 1 つ。1875 年に作られた**《ホテルにて》**は、国内外から集った飲食サービス業者の会合に際して作られた曲である。

晩年を迎えつつあったシュトラウス 2 世は、1898 年、バレエ音楽の分野にも取り組み始めるが、その翌年に完成を待たずして亡くなってしまった。そんな未完の作品の断片を繋ぎ合わせてピアニストのアルフレート・グリュンフェルト（1852-1924）が再構成したのが、**「バレエ音楽《シンデレラ》に基づく 演奏会用パラフレーズ」**である。

オペレッタの分野に進出して以降のシュトラウス 2 世は、劇中に登場するダンス音楽を新作ダンス音楽として発表することが多くなり、純然たる「新作ダンス音楽」は稀になっていった。そうした中で、ハプスブルク帝国が培ってきた文化発信と、各国の融和を目標に開催されたウィーン国際音楽演劇博覧会のために 1892 年に書き下ろされたのが、ワルツ**《もろびと手をとり》**である。しかも博覧会の理念とは裏腹に、博覧会の主催者とシュトラウス 2 世がもめたため、博覧会では初演されなかったという曰くつきの作品となっている。

現在でもウィーンの代名詞である舞踏会。その締めくくりには伝統的に、ウィーンの民衆劇作家兼俳優として活躍したフェルディナント・ライムント（1790-1836）が 1826 年に発表した『100 万長者になった農民』に登場する**「兄弟よ お達者で」**が取り上げられる。なお作曲をおこなったのは、第 1 部にも登場した、シュトラウス 2 世の師、ドレクスラー。青春や人生の黄昏をひそやかに歌うその内容は、舞踏会の終わりにこの上なく相応しい。